



# 東日本大震災後、 被災地の自治体職員になった 私の想い

2011年3月に発生した東日本大震災から間もなく7年目を迎えます。被災地では、今も多くの自治体職員が日々復興に向けて取り組んでいます。その中から、今回は岩手県内の市町で震災後に採用になったお二人の方の体験談をご紹介します。

## 被災地の自治体職員としての仕事のやりがい

陸前高田市防災局防災課 課長補佐 中村 吉雄



【なかもら・よしお】  
1972年、兵庫県芦屋市出身。1999年、東京都立大学大学院都市科学研究科（都市防災専攻）修了。民間企業勤務を経て、2013年岩手県入庁後、2015年に陸前高田市入庁。現在、県内外の数多くの防災講演会の講師も務める。

倒れた家具や割れた食器で足の踏み場もありませんでした。

何より大きなショックを受けたのは、思い出が詰まり慣れ親しんでいた街の風景が一変していたことでした。それまで災害の現場は、テレビなどで見ただけで、実際に被災地に行くことがありませんでしたので、目の前に

広がる光景が現実のものであるとは受け入れられませんでした。災害が、一瞬にして日常生活や人の人生さえも大きく変えてしまうことに恐ろしさを感じました。

### 何かを伝えたい

阪神・淡路大震災で被災した経験を活かし、現在私は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田市防災局防災課に勤務しています。



震災直後の陸前高田市

被災した当時の私は、防災に興味があるわけでもなく、ましてや専門的な知識等もありませんでした。しかし、自分の肌で感じたこの悔しい気持ちや無念さを、どうにかして全国に、いや世界に伝えたいと思いました。同時に、後世に伝える責任もあると感じていました。そこで大学院から専攻を防災に変え、専門的な知識を身につけました。

### 東日本大震災発生

阪神・淡路大震災から16年が経過した、2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生しました。

発災から2週間後、岩手県宮古市の田老地区を訪問しました。津波で何もかもが失われた街を見た瞬間、阪神・淡路大震災の光景がフラッシュバックのように甦ってきました。

### 阪神・淡路大震災の経験

私の故郷である兵庫県芦屋市は、1995年の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けました。当時私は、県外の大学に在籍しており、大きな揺れは体験しませんでした。翌朝には地元に戻りました。幸い、実家のマンションに大きな被害はありませんでしたが、部屋が高層階にあったため、室内は

した。これまでも、他の被災地を訪問した経験はありましたが、この時のように鮮明に思い出されたことはありませんでした。阪神・淡路大震災当時、多くの人々から支援を受け、支えられたからこそ、復興が成し遂げられたことへの感謝の気持ちが湧き起り、微力ではあるものの、自分も何か東日本大震災の被災地で貢献できることがないかと考えました。

### 被災地で働くことの意味

東日本大震災の被災地で活動できる場所を探していた時、岩手県が被災市町村に任期付で派遣する職員の募集を行っていることを知りました。早速資料を取り寄せると、県内の各沿岸市町村の求人が掲載されていました。そこで私の目に飛び込んできたのは「陸



防災関連の視察や研修で訪れた方の前で話す機会も多い

前高田市の防災関連業務」という文字でした。これなら自分も貢献できると思いました。その一方で、陸前高田市は、震災で壊滅的な被害を受け、市役所庁舎を含めほぼ全ての町の機能を喪失した場所であったため、本当に自分が力になれるのかも悩みました。また、被災地で働くことに対し、周囲からは反対されたり疑問を投げかけられたりもしました。

しかし、岩手県や陸前高田市に住んだこともない、親類や知人もいない縁もゆかりもない人間が行くことに意味があると、私は考えました。自分も阪神・淡路大震災で被災した直後、外部からの情報がほとんど届かず、他の地域から忘れ去られたのではないかと感じ、絶望感や虚無感に襲われました。そんな時、全国から支援に来てくださった方たちと出会い、勇気づけられました。支援の内容に関係なく、遠くの土地から誰かが来てくれたことに、励まされ元氣と勇気が湧いたのです。

### 「陸前高田市 東日本大震災検証報告書」

自分が行くことで元氣が出る人が必ずいると信じ、陸前高田市で働く決心をしました。私が最初に陸前高田市で携わった業務は、『陸前高田市 東日本大震災検証報告書』の取りまとめでした。検証報告書を作成した目的は、「なぜこれだけの大きな被害が発生したのか」と「壊滅的な被害を受けて学ん

だ教訓を後世に伝える」ことの2つでした。作成作業は、決して順調に進行しませんでした。検証委員会の会議の間では様々な意見が出され、検証項目も時間の経過とともに増えていきました。このような状況から、予定していた時期よりも完成はかなり遅れる結果となりました。

検証報告書の間報告を発表する度に、厳しいご意見やお叱りをいただき、市外から来た私が作成に携わっていることに対するご批判もありました。この様子を見て、周りの上司や同僚が心配し気づかってくれましたが、自分自身はそれほどショックは受けていませんでした。それは単に精神力の強い弱いではなく、阪神・淡路大震災の経験があつたからです。

当時を振り返ると、被災した悲しみと苦しみの気持ちに行き場がないあまり、周囲の人に迷惑だと自覚しながらも、その気持ちをぶつけていた人が多くいたのを覚えています。私自身もそうだったかも知れません。災害に苦しめられた共通の経験があつたからこそ、理解できたのだと思います。この共通の経験が、陸前高田市民の方々との距離を縮め、信頼を築けたことに繋がったと思います。

### やるべきことは、 まだたくさんある

東日本大震災の検証報告書を完成させた後は、得られた教訓をどのような形で活かすかが、次の私の業務でした。まず、はじ

めに取りかかったのは、震災の教訓を活かした『避難マニュアル』『避難所運営マニュアル』『災害時初動対応マニュアル』の3つのマニュアルの策定でした。



この3つのマニュアルを策定し終わった頃、任期期間の3年が近づいていました。しかし、陸前高田市の防災業務には、避難訓練の復活、自主防災組織の再結成、防災教育の充実等、数多くのやるべき業務が残っていました。そこで、まだ自分が貢献できることがあるのではないかと考え、陸前高田市の正職員となりました。

### これからの仕事の目標

私は、防災関連の視察や研修でいらっしやった方の前でお話をさせていただく機会が多いのですが、皆さん熱心に耳を傾け、私たちの教訓を学ばれています。そして、それぞれの場所に持ち帰り、防災・減災に活かしてくださっています。

これからの私の仕事の目標は、震災の記憶を風化させることなく、多くの人々に教訓を発信することだと考えています。この発信が、日本をはじめ世界中の人々の命や財産を守る防災・減災に役立っている可能性を感じた時、何物にも変えられない仕事のやりがいを感じます。

## 民間企業での経験を活かし、ふるさとに恩返し

大槌町震災伝承推進室室長 北田 竹美



【きただ・たけみ】  
1950年、岩手県大槌町吉里吉里出身。1970年NTT(当時は日本電信電話公社)に入社後、システムエンジニアやプログラムマネージャとして34年間勤務。同社を2004年退社後、フュージョンコミュニケーションズ株式会社に入社。2015年5月に同社を退職後の6月、大槌町入庁。総務部、総合政策部、公民連携室室長を経て2017年4月より現職。現在、『大槌町東日本震災記録誌』編纂事業に取り組んでいる。

### 東日本大震災後の故郷の姿

大槌町は、東日本大震災で最も甚大な被害を受けた自治体の1つです。人口の1割

を失い、6割の家屋が被災し、6000人以上が避難、町役場そのものが津波の直撃を受け、当時の町長を含む職員の約4分の1が亡くなりました。

私はその大槌町に、役場職員として震災

後の2015年6月に赴任しました。仕事は情報システム管理担当、当時64歳でした。その頃、大槌の町はむき出しになったままの造成地が広がり、多くのトラックやショベルカーが砂埃を舞い上げて町中を行き交い、夜は真っ暗闇の中、道に沿って張り巡らされた赤い電球だけが点滅していました。現在、役場から見える風景はあちらこちらに真新しい家々が立ち並び、町の様子は急激に変わってきています。

私はもともと、大槌町吉里吉里地区の生まれです。20歳の時にこの町を離れ、仙台市でNTT(当時は日本電信電話公社)に就職し、プログラマーとして働き始めました。コンピュータ黎明期と言われる1970年から40年間、ソフトウェア技術者として生きてきました。手掛けたビジネスは汎用コンピュータからサーバ系システムまで、開発対象業種は金融、生産管理、電子交換機の遠隔オペレーティングシステム等、多岐にわたりました。若くしてこの地を去り、今こうして大槌町の役場職員として、復興の仕事に関わっていることに不思議な縁を感じます。

### 仕事で培ったスキルを生かし 無償でホームページ制作

その縁は、震災が起こった2011年の5月に、大槌町の公式ホームページ制作を手掛けたことから始まりました。当時、大槌町の公式ホームページが稼動していたサーバは津波で全壊してしまつたため、困っ

震災から6年が経過し、大槌町も徐々に復興してきている



た町はブログを使って情報を発信していました。町内はもちろんのこと町外に避難した町民も多く、ホームページによる情報配信の必要性は大きかったです。

しかし、検索機能すらないブログでは、満足な情報配信ができるはずありません。またサイト構築には、多額の開発費と期間が掛かります。町は情報システム担当者を震災で失っていました。震災から間もない頃で、数百万円も掛かるホームページ開発費を捻出する予算もありませんでした。

その状況を東京で知った私は、震災から2カ月経ったある日、車を大槌町に向けて

走らせました。私は大規模ソフトウェア開発が専門ですが、一方でウェブサイト構築のノウハウも持ち合わせていたので、町のホームページ制作に必要な機能やソフトウェアの基盤等、構築に必要な条件を全て見通すことができたからです。大槌町に着いた私は、早速町役場のリーダーと会い、無償でホームページを制作させてほしいと提案し、検討していただくことになりました。1週間後、了承のメールが届きました。

今、町のホームページは毎日職員自らが更新し、当たり前のように世界中に情報が発信されていますが、一介のプログラマーを信頼し、二つ返事で了承した当時の町役場の決断に心から感謝しています。私がこの町出身であるということ、ふるさとのために尽くしたいという一心が通じたのだと思います。

その後、私が町の公式ホームページを自力で制作していることを知った企業や開発者から協力したいとの申し出があり、CMS（コンテンツ管理システム）機能の追加やクラウド環境が無料提供されました。公式ホームページにおいて、アクセシビリティやセキュリティ対策等は必須機能ですが、独力で開発するには人手が足りませんでしたから、この時ほど嬉しかったことはありません。こうして職員が簡単に投稿できる仕組みや情報管理機能が強化され、現在のホームページに成長していったのです。これが大槌町役場と私の最初の関わりです。

### 退職後、ふるさとに恩返しを

それから3年が過ぎ、2014年の初夏に、大槌町役場から再び情報システム管理担当をしてほしいというオファーがありました。ちょうど退職後は年金生活でもしようと考えていた矢先、家内の「ふるさとに恩を返すのは今では？」という言葉に後押しされ、それならばと単身大槌町に移住する決意をしました。

当初は役場内の情報システム管理が仕事でしたが、赴任して3カ月目で経営企画部門に異動となり、以後、復興専門官として、まちづくり業務を担当することになりました。この部門で最初に手掛けた仕事は、復興事業の継続可否を問う事業仕分け作業でした。事業仕分けは一時期、前民主党が政権を担っていた時代の目玉政策でしたが、その地方行政版ということです。2015年度当時、町の復興事業は中盤戦にあり、予断を許さない状況下でしたから、事業見直しは町の復興に直接影響する非常に大事な仕事でした。

作業は300件近い事業内容を1つ1つヒアリングし、最終的に継続・休止・変更・廃止の4つに区分けしていくものです。課題に対する一定の方向性も付け加えなければなりません。門外漢の私にはとても骨の折れる作業でしたが、7人の役場職員（当時は「七人の侍」と言っていました）の力

強い協力があり、2カ月を掛けて全て見直しができました。

この作業を通して、早期に町行政の全体像を把握することができたのは、これ以後の事業を進める上でとても勉強になりました。そして民間と行政の考え方、手順の違いなどについても身をもって知ることができました。

### 町の皆さんと共に

現在は震災伝承推進室という部門で、図書館を含む総合施設および集会所の建設、震災伝承施設企画の仕事に従事しています。ここでの仕事の1つ、「生きた証プロジェクト事業」について紹介したいと思います。

この事業は2014年度に開始した事業で、震災を「忘れない」「悼む」「後世に伝える」の3つを事業目標とし、今回の震災で犠牲となられた大槌町の1285名の方々の生前の様子、震災の時の行動、そしてご遺族の思いなどを聞き取り、記録する震災記録事業です。

聞き取りはご遺族全ての住所をリストアップし、電話や郵便で聞き取りの可否を確認します。その後、了解を得られたご遺族のもとへ直接出向き聞き取りを行い、メモや録音から内容を書き起こしていきます。その原稿をもとに、さらに編集委員会で校正を繰り返し、最終的に回顧録冊子としてまとめたものです。

作業は完成まで3年を要し、2017年3月11日の慰霊祭の祭壇には、『生きた証回顧録』第一版1000部を納めることができました。回顧録には、545名の犠牲者の方の名前が掲載されました。

当初、本事業は町外の事業者に委託しましたが、2016年に町民自らが立ち上がり協議会を結成し、現在はこの協議会が聞き取りを継続しています。

本事業は公民連携事業として始まり、個人はもとより各町内会等、多くの町民の皆さんの協力があつて成し得たことです。町の人々の震災に負けない、前を向こうとする強い心、そして、後世に伝えようとする姿勢に頭が下がる思いです。私は、この『生きた証回顧録』は大槌町が誇る震災記録誌だと思っています。

震災から6年余り、インフラ整備が進み、ようやく町には真新しい家々が立ち並び始め、病院や小中一貫校等公共施設も建設され、2018年には宮古市と釜石市を結ぶ旧山田線が開通すると聞いています。町は徐々に活気を取り戻しつつありますが、一方、仮設住宅には未だに2000名近い方が住んでいるという現実もあります。人口減少対策、生業の再生等、課題は山積みであり、町はこれから復興の正念場を迎えます。

私はここに来て2年半が経ちました。仮設住宅での単身生活と行政の仕事との両立は、大変でないと言ったら嘘になります。最も苦労したのは町民の皆さんとの合意形

成です。皆さんはそれぞれ、複雑な事情を抱えています。解決に至る復興への道は、1つということはないのです。被災地復興という特殊事情に加え、民間から行政への仕事の転換は私の専門分野を超えるものばかりで、多くの方々のサポートがなければ何1つできなかったことでしょう。

震災以後、この地は未だに非日常の暮らしが続いています。そういう環境下にあつて、今日まで私を支えてきたものは何かと問われたら、即座に「私を受け入れてくれた職員と町の皆さんの心」と答えます。

これから2018年度に向けて、『大槌町震災記録誌』の編纂事業、中心市街地に建設される総合施設運営管理、震災伝承施設企画とシステムの維持管理等、復興は道半ばであり、やることはたくさん残っています。微力ながら皆さんと力を合わせ、残りの任期を全うしたいと考えています。



公民連携で作られた震災記録誌『生きた証回顧録』